

● 優秀賞

和文化教育で一人一人に 確かな力をつける 学校文化の創造

広島県東広島市立河内小学校 きはらかよこ 木原加代子



〈概要〉

特色ある学校を考えると、「始めに子どもありき」は必然である。平成19年度に本校に赴任する際、多くの学校課題を引き継いだ。児童の実態として、話を集中して聞く学習習慣ができていないこと、授業中に発言することが少なく、発表の声も小さい。大勢の前では物怖じしてしまい学力も低いことである。強みとして、歌うことを好んでいることであった。

そこで、和文化教育を取り入れ、落ち着きのある学校文化の創造を目標にした。具体的には、「礼に始まり礼に終わる」学びの構えを授業に取り入れ、集中力を高めて学力を向上させること。得意な歌を一人一曲の持ち歌にして、童謡を取り上げ、ソロで歌える力をつけ、自尊感情を高めることにした。これらの取組みを4年間継続したことで、一人一人に確かな力をつける学校文化の一端をまとめた。

I はじめに

学校は、社会に出ていくための準備をするところであると考えている。学習指導要領で示されている「生きる力」の育成そのものである。現代社会は先行き不透明であり、いつ何が起きてても不思議ではない。この激変する社会へはばたいていく児童に必要な力をどのようにつけていけばよいのかという学校力が問われると

ころである。そこで、平成19年度からの4年間、和文化教育を通して、童謡を歌ったり、集中して学ぶ態度を育てたりすることで、一人一人に確かな力をつけることができる学校文化の創造に取り組んだ。

II 主題設定の理由

和文化教育に取り組むきっかけは、平成20年度に、東広島市で開催された和文化教育全国大会の実践協力校として、平成19年度から指定を受けたことである。幸いにも歌うことが好きな児童が多いという強みがあったため、衰退傾向にある童謡を歌うことで和文化教育に取り組むことにした。

童謡は、児童にとって身近な生活文化の一つであり、自然の美しさ、四季の移り変わり、言葉の面白さ、人の温もりなどを美しい歌詞とメロディーで表現している。古きよき時代に作られた童謡を、今を生きる者の責務として、継承していく必要があると考えた。そこで、いつでもどこでも物怖じすることなく、一人一曲の持ち歌をソロで歌えるようにし、童謡のよさに気づく児童を育てることにした。国際化に向けて生きていく児童が、外国で日本の文化を披露する際、童謡が歌えることで、学んだことが役立つことを実感するであろう。そのためにも、全児童がソロで歌えるよう、学校全体で取り組んでいくことが、学校文化を創造することになる

と考える。

また、学校教育の場において、一人一人を大切にするということは当然であり、学校教育の使命である。しかし、自己表現一つを取り上げても、どの教科や領域で本当に一人一人が自信を持つまでの力をつけているだろうか。そこで、和文化教育として、全児童に、持ち歌の童謡を「声のアルバム」としてCDに収録できる確かな力をつける。同時に「学びの構え」としての学習規律の徹底をし、集中して学ぶ力をつければ学力向上を図ることができると考え、研究主題を設定した。

Ⅲ 研究の基本的な考え方

1 和文化教育

(1) なぜ和文化教育が必要なのか

① 児童の実態から

資料1は、平成19年度初旬の児童の実態である。強みとして、明るく元気に歌うことが好きである。弱みとして、授業に集中できず、学力が低い。発表時には物怖じし、表現する力が弱いという課題がある。

- 歌うことが好きな子ども
- 明るく元気に廊下を走り回る子ども
- 返事ができない子ども
- 話を集中して聞くことができない子ども
- 一人で発表するとき、物怖じして声が小さくなる子ども
- 権利主張ばかりで、義務を知らない子ども
- 学力の低い子ども

●資料1 / 平成19年度初旬の児童の実態

② 社会情勢から

国際化の急速な発展に伴い生活様式が変化した今、礼儀を身につけていない人々が増加した。また、日本に古くから伝わっている行事の衰退化もみられる。ことばの面でも慣用語に対する調査で、正しい日本語が理解されていない面があることが挙げられている。科学の発達とは逆に、日本古来のよさが失われつつある。今こそ和文化を見直し、よさを継

承していく必要があると考える。

③ 求められる「和」の心

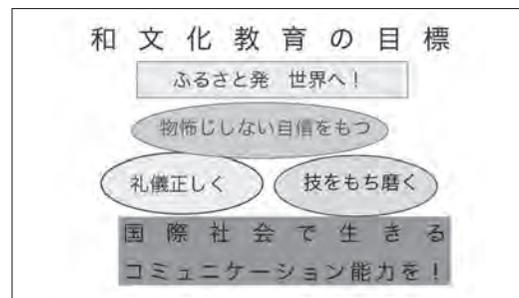
新学習指導要領では道徳教育を要とすることが挙げられている。思いやりの心や協調性がなくては、集団生活は成り立たないと考えられる。そのためにも、古きに学ぶ心を大切にしたい。そして、地域、日本を愛する心、四季を愛で愉しむ心、伝統文化を敬う心などの「和」の心を求めていく必要があると考える。

(2) 和文化の教育力

和文化教育のもたらすものは、文化の価値に目覚めていくことができ、人間形成の核となる活動である。また、文化は人々が作り上げた活動の総決算であり、社会の基盤となる。そして、文化は人の心と体に染み込んだ物であり、人間形成の土台になると考える。

(3) 和文化教育の目標

資料2は、和文化教育の目標である。和文化教育を通して、礼儀正しく、何か一つの技を持ち磨くことで物怖じしないで自信を持つ児童が育つと考える。また、国際社会で生きるコミュニケーション能力の基礎も培う。



●資料2 / 和文化教育の目標

(4) 和文化教育でつけたい力

和文化教育では、次のような力をつける。

- 礼儀正しい態度で、学ぶ構えづくりをする。
- 技を持ち、文化を受け継ぐ力をつける。

- ねばり強く、意欲の持続ができる力をつける。
- 継続し取り組むことができる力をつける。
- 物怖じしないで、自己表現できる力をつける。
- 考え工夫し、学びの自律ができるようにする。

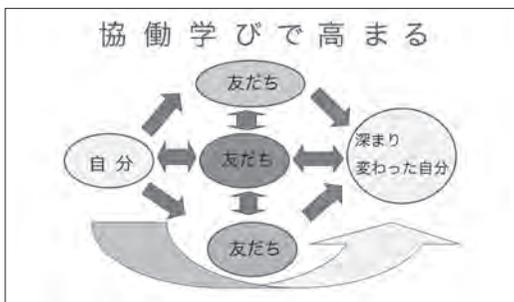
2 確かな力

(1) 個人差からのスタート

学校教育は、集団で学ぶところに意義がある。したがって、学級集団で個人差があることは当然である。興味・関心の差、学習速度の差、問題意識の差、習熟度の差など細部にわたって個人差がある。童謡を歌う際には、一人一人の違いを肯定的に受け止め、お互いに認め合い協力しながら高まっていく学級文化の構築を行っていく。

(2) 協働学び

学習活動には、個別学習、ペア学習、グループ学習、集団思考などの学習形態がある。学校教育のよさは、個別学習で留まるのではなく、友達との関わりを生かした協働学びができることである。他者を認め合う温かい学級集団の中で、主体的に学習に参加し、意見交流をする活動を通して、心が豊かになり、確かな力がつくものと考えられる。



(3) 学校文化

学級集団として、児童と教師が共に考え、協力しながら共に問題解決をしていく過程を学びの基礎とする。これは、学級に留まらず学校全体でベクトルを揃えて取り組んでいく過程も同じである。目標に向けて共に高まっていこうとする学びの連鎖で学校文化ができあがると考える。

IV 研究仮説・検証の視点と方法

1 研究仮説

和文化教育を推進していく過程において、ソロで歌う童謡の取組みや学習規律の徹底を学習活動に位置づけた実践をすれば、一人一人の児童が物怖じしないで自己表現できる力や集中して学ぶ確かな力がつき、学力が向上するであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
(1) ソロで歌う童謡の取組みは、一人一人に物怖じしないで自己表現できる確かな力をつけたか。	行動観察、アンケートの分析、感想文CD作成
(2) 学習規律の徹底で、集中してねばり強く学習する力がつき、学力が向上したか。	行動観察、学力テストの分析

V 研究の実践と分析、考察

1 ソロで歌う童謡の取組みは、一人一人に物怖じしないで自己表現できる確かな力をつけたか

(1) 選曲と歌の設計図づくり

まず、全児童に童謡の曲を知らせる必要があった。そこで、楽譜やCDを収集し、給食時間に流し、紹介した。

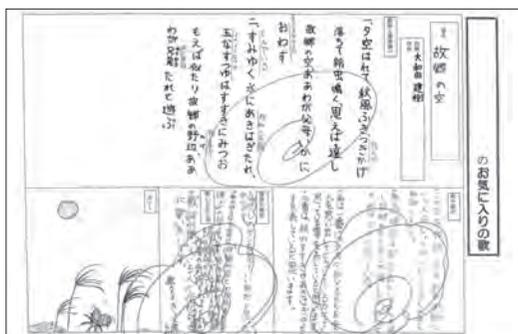


楽譜とCDの収集

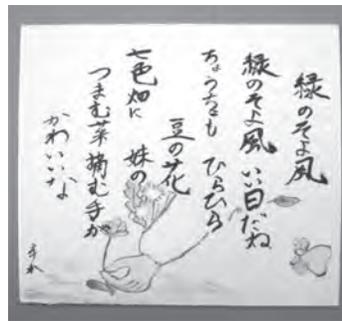


色紙づくり

ゲストティーチャーの協力



●資料3 / お気に入りの歌の設計図



できあがった色紙

れない心を育てる学習活動である。

童謡の選曲は、家族からのリクエストを優先し、決めかねている児童は、教師と相談して決定する。学校側の配慮は、難易度の調整、重ならないよう、一人一曲になるようアドバイスと調整を行った。

選曲した童謡を感情移入して歌うために、資料3の「お気に入りの歌の設計図」の作成から取り組んだ。

歌詞の意味調べ、曲の紹介、選曲した理由、歌い方の工夫などを書き、イメージを助ける絵を描かせた。この調べ学習は、歌うことが苦手な児童も意欲的に取り組んだ。

(2) 色紙づくり

色紙作りは初めに筆や筆ペンで、歌詞を書くことから行。その後、地域のゲストティーチャーの協力を得て、絵を描いていく。完成した一枚の色紙には、児童一人一人の思いや意図が入っている。童謡を歌うことは、単に歌を歌うということではない。日本のことばや自然、生活文化などのよさを知り、今後を引き継いでいきたいという、ふるさとを愛しふるさとを忘

(3) 一人歌いの取組み



歌で始まる授業

一人一人の児童に歌う力を確実につけていくには、練習回数が必要である。そこで、授業の最初の号令がわりに、日直児童の持ち歌を全員で歌うことから始めた。教師は、拍を振る程度の指揮をし、全児童の視線を集め、集中して歌う学級文化を創っていく。慣れていくにしたがい、2フレーズ程度をソロで歌い、残りのフレーズを全員で歌うようにする。この段階で、どの児童もソロで歌えるようになっているが、歌うことが苦手な児童へは無理強いをしない。歌えるようになるまでは、前に出るだけで、最初から全員で歌う。音楽は、全員で歌いながら個の

力をつけていくことができる教科である。個人差からのスタートという考え方で、個に応じて歌う力をつけ、温かく支え合う学級集団づくりも培っていく。この活動で、個が生き、全体が生きる学校文化の醍醐味が体感できる。

(4) ソロで歌える自慢の一曲

「歌で広がる心の絆」というタイトルのもと、できあがった色紙は、曲名の五十音順に職員室前の廊下に掲示した。「リクエストをどうぞ」の呼びかけで、来校者にリクエストをもらう。対象の児童は学年と名前、曲名を告げ、アカペラで堂々と歌うことができる。歌い終わった児童は、「どきどきしたけど、歌っていると、気持ちがよかった。ほめられるとまた歌いたくなる。」などの感想をいう。また、リクエストをされた方は、驚きの感動を児童に伝えるとともに、満面の笑みを見せてくださる。

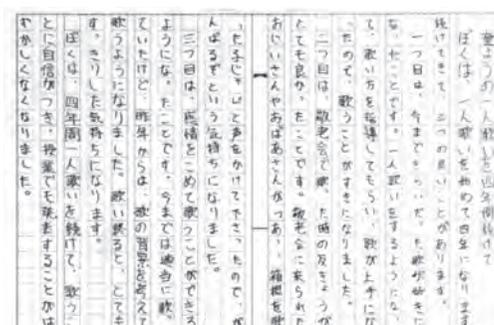


リクエストをどうぞ!

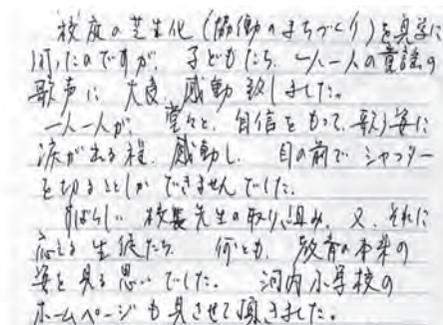
平成 21 年 7 月、「ひろしま童謡音楽祭」に招かれ、アステールプラザの小ホールで発表を行った。入学して間もない 1 年生も肉声で堂々と歌うことができた。観客席からは、一緒に歌う方もあり、大盛況であった。発表後の 1 年生児童は、「大勢のお客さんの前で少し緊張したけど、歌っていくうちに嬉しくなった。」という感想を述べた。2 年生児童も、「緊張しても歌うことができ、自信がついた。」と述べていた。後日、学校へ賞賛の電話や便りがあり、自己表現できる確かな力がついたことを実感した。資料 4・5 は、児童の作文と来校者の手紙である。



ひろしま童謡音楽祭に出場



●資料 4 / 6年生児童の作文



●資料 5 / 来校者の手紙

6 年生児童は、歌うことを通して自信をつけ、表現力が高まり、他の授業でも積極的に発言できるようになったと述べている。来校者の手紙からは、堂々と自信を持って歌う姿に涙がでるほど感動したと書かれてあり、歌う力がついたと考える。

(5) 児童のアンケート調査結果

資料 6 は、童謡を歌う取組みについての児童のアンケート調査の結果である。この結果から、自信をつけ、レポーターが増え、色紙を書く

活動を通して歌への関心が高まり、積極的に関わろうとする態度がうかがえる。

成果	選択した児童の主な理由
自信が ついた (26%)	<ul style="list-style-type: none"> ・美しい声が出せるよう努力したから。 ・歌が上手と先生方や友達にほめられて嬉しかった。 ・自分一人で歌うと気持ちがいいから。 ・堂々と歌えるようになったから。 ・一人でいろいろな場で歌ったから。 ・いろいろな人にアドバイスをもらって自信がついた。
レパートリーが 増えた (26%)	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな歌が歌えるようになった。 ・いろいろな人の歌を聴いて、いろいろな歌が歌えるようになった。 ・知らない歌が歌えるようになった。
色紙に書くことが 好きになった (24%)	<ul style="list-style-type: none"> ・絵を描くのが楽しかった。 ・歌の内容を想像できるようになった。 ・歌について深く知ることができた。 ・色紙ができあがったとき、嬉しかった。 ・筆で書くのは、どきどきしたけど、うまくできて嬉しかった。
歌うことが好き になった (21%)	<ul style="list-style-type: none"> ・歌を歌うのが楽しかった。 ・歌っていくことで、前より歌うことが好きになった。 ・童謡を歌えるようになったから。
アドバイスを できるよう になった (3%)	<ul style="list-style-type: none"> ・先生にほめられ、アドバイスができるようになった。 ・ちがいがわかるようになってきた。 ・友達がアドバイスをしているのを見て、できるようになった。

●資料6 / 児童アンケートの結果

(6) 「声のアルバム」CD作り

童謡を歌う取組みを始めた年から、年度末に全児童の歌を収録したCDを作成してきた。「声のアルバム」として、全児童に配布する。また、



みんなの歌声アルバムはCDで

年度途中には、ダイジェスト版を作り、来訪者へ渡す。車社会になり、移動の際に聴いていただき、家族にも地域にも好評である。むろん、歌っている児童自身も満足している。

以上の結果から、ソロで歌う童謡の取組みは、一人一人に物怖じしないで自己表現できる確かな力がついたといえる。

2 学習規律の徹底で、集中してねばり強く学習する力がつき、学力が向上したか

(1) 学習規律と「学びの技」カード

物事を徹底して行う際に必要なことは、学校全体でベクトルを揃えることである。

そこで、資料7のようにベクトルを揃えるための学習規律を設けた。授業の始めに学びの構えとして、丁寧な礼（5拍を数えるくらい）をする。また、聴く態度として、相手を意識し、体を向け、目を見て、うなずきや返事をする。背筋を伸ばして学習できるよう、椅子の中心から前に座らせることにした。

しかし、学習規律は、教師の側からのみ徹底

- 和文化は「学びの構え」から
 - ・礼に始まり 礼に終わる
 - ・丁寧な礼（5まで数えるくらいに）
- 学習規律の徹底
 - ・聴く態度（相手を意識し、体を向け、目を見て、うなずきや返事をする）
 - ・背筋を伸ばして座る（立腰、椅子の中心にテーブルをはる）

●資料7 / ベクトルを揃える学習規律

月日	1月10日	水曜日	教科	国語
この時間の めあて	えん筆を正しくもって 字を書く。			
ふり仮名				
書	<p>読むときはまんなかを見ます。 書くときはまんなかを見ます。 書くときはまんなかを見ます。</p>			
読みの がんばり	えん筆の下を持って書く ついでに書くのを止めます。 書く時は十分に1回目は止めます。			
この授業の ふり仮名	<p>① 横線がかった ② ③-④-⑤-⑥ ⑦ ⑧-⑨-⑩-⑪ ⑫ ⑬-⑭-⑮-⑯</p>			

●資料8 / 「学びの技」カード

するのでなく、児童が主体的に行うことが大切である。そこで、資料8の「学びの技」カードを作成し、毎時間の振り返りをさせ、児童自らが気をつけるようにした。このカードは、目標を立て、自己チェックをしながら実行、自己評価をし、自己強化ををするといった一連の振り返りカードである。1時間の振り返りは、1から5段階にし、集中の度合いを図で表し、評価しやすいよう工夫した。資料9は、「学びの技」カードを使って、高まったことがわかる児童の感想である。

児童は、授業の始めに深く長い礼をすることで、遊びから学習への心の切り替えをしていった。このことは、教師の指示がよく通るだけでなく、児童の発言も真剣に聴く態度が育った。また、挙手も真っ直ぐにできるようになり、積極的に授業へ向かう態度がうかがえる。発言する側に対し、体を向け真剣に聴こうとする態度や背筋を伸ばしよい姿勢で書く習慣もついた。

新春の書初めは、全児童が寒い体育館で行った。書初めをする際の説明も集中して聞く態度がうかがえる。これらの結果から、どの学級の児童も学習規律の徹底が図られたと考える。

- 返事ができるようになった。
- 姿勢に気をつけることができるようになった。
- 学習に集中できるようになった。
- 振り返りをして、明日の目標を立てることができた。
- カードを楽しく使って学んでいくことができた。
- カードのおかげで自分がとてもよくなったのがわかって嬉しかった。
- 授業の時だけでなく、生活面でも使っていきたい。

●資料9 / 「学びの技」カードを使った児童の評価



長い礼で心の切り替えを！



まっすぐに手を挙げる



「話す・聴く」を意識する



姿勢よく書く児童



寒い体育館での書初め大会

(2) 全国学力・学習状況調査結果

図1は、過去3年間の全国学力・学習状況調査結果（平成22年度は抽出校外）である。この結果からみると、平成19年度は国語A問題、国語B問題ともに全国平均をやや上回っている。しかし、算数科はA問題、B問題ともに、全国平均を下回っている。これは、4月に実施するため、国語を中心に研究推進してきた前年度の学力の結果であると考えられる。そこで、平成19年度からは、研究教科を算数科と理科の2教科にした。また、日頃の授業も活用力を考慮した取組みをするとともに、全学年、学習規律の徹底で、特に「聴く」を重視した。さらに、授業の中に書く活動を位置づけ、ノート指導にも取り組んだ。その結果、平成20年度は、どちらの教科もB問題が全国平均を大きく上回った。平成20年度からは、聞き取る力も書く活動も、児童が集中して取り組むようになり、授業中に学習規律の面で教師が注意することがほとんどなくなった。

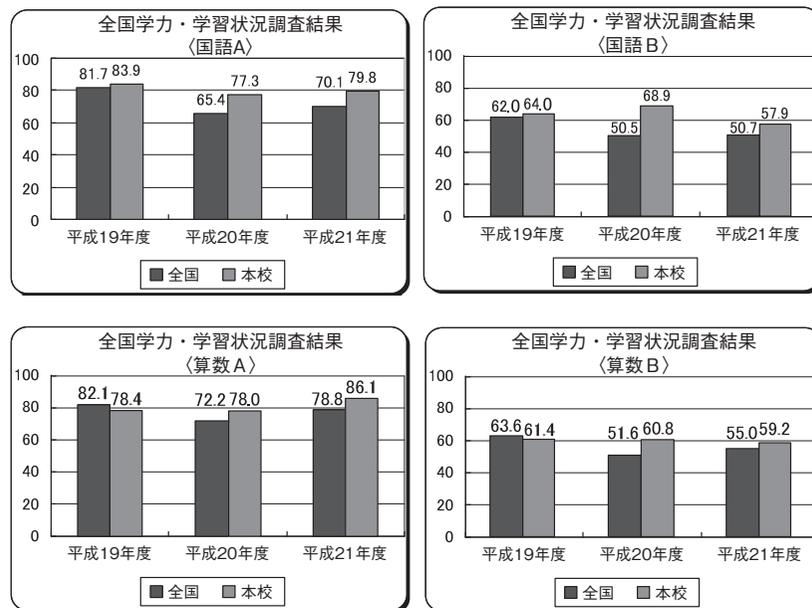
また、平成19年度のテスト実施の際は、最後までねばり強く考えることはなく、無回答のまま提出した児童が多かった。しかし、平

成20年度からは、学習規律の徹底で集中して授業に取り組むようになったため、最後までねばり強く考え、無回答で提出する児童はいなくなった。

(3) 広島県「基礎・基本」定着状況調査結果

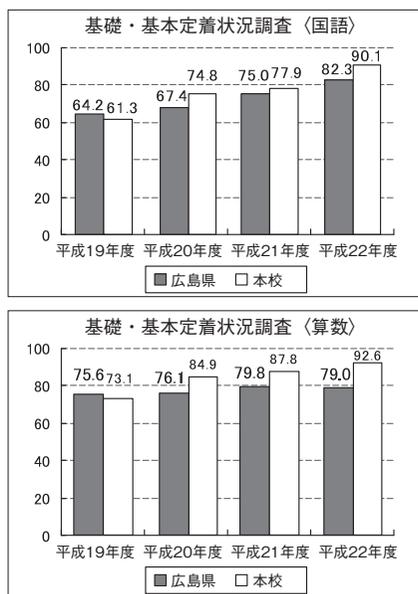
図2は、広島県が独自に行っている小学校5年生を対象にした「基礎・基本」定着状況調査の結果である。毎年6月に実施し、4年生で学習した内容が問われる調査である。国語科と算数科の2教科で実施する。平成19年度は、国語科、算数科ともに県平均を下回っていた。授業改善に取り組んできた結果、年を経るごとに県平均を上回ってきたことがわかる。特に、平成22年度は、国語科90.1、算数科92.6と高い通過率になった。学習規律の徹底により、授業中に教師は態度面で注意をすることなく学習内容を進めることができるようになった。また、集中して話を聴く力がついたため、一問一答の授業から、一問多答の授業になり、協働学びが定着してきた。

全国学力・学習状況調査と広島県「基礎・基本」定着状況調査の結果から学力が向上したと考え



●図1 / 過去3年間の全国学力・学習状況調査結果

る。教師と児童が共に学習規律を徹底し、集中してねばり強く学習していくことは、学力を高める上で効果があることがわかった。



●図2 / 「基礎・基本」定着状況調査結果

以上の結果から、ソロで歌う童謡の取組みや学ぶ学習規律の徹底は、一人一人の児童が物怖じしないで自己表現できる力や集中して学ぶ確かな力がつき、学力向上を図る上で有効であるといえる。

VI おわりに

和文化教育を取り入れ、日本の文化のよさに触れさせた童謡は、家庭や地域との絆を深めることになった。また、学習規律の徹底で、授業中だけでなく、平素の生活でもあいさつや返事ができるようになった。状況に応じて敬語で話すこともできるようになり、学力も向上した。和文化教育に取り組んでからは、学校全体が落ち着いており、学校事故がほとんど発生しなくなった。「毎日が研究会」を売りに、児童も教師も生き生きと学びを続ける学校文化ができつつある。今後も児童の自尊感情を高め、和文化教育を継続し、伝統文化のよさがわかる学校文化の創造に努めていきたい。

お気に入りの歌 設計図

★歌詞を書いていねいに筆ペンかボールペンで書く。

★わからないことばの意味を調べて書きこむ。

★筆で書く場合は、鉛筆で下書きをして、墨が手でこすれないように左側から書く。

○お気に入りの歌の曲名を書く。

★伝統文化、和文化につながる歌

★情緒的な童謡

★古い曲

★先人が歌ってみたい。

★歌おきたい曲を事前にいくらか選んでおくのもいい。

★子どもたちが自分の好きなお気に入りの歌があったら、一緒に歌い入りの歌ができたって、さげ山、さげ山と進めていく。

歌詞と五拍子譜

作曲

作詞

作曲

★挿絵をかく。

カット

歌い方の工夫

な何、この曲を選んだの？

○歌詞のどの部分が好きなの？

○どうしてその部分が好きなの？

○これから曲を取り入れたら、○どんなふう歌い方をしたいの？

★選んだ理由を書く。

選曲の理由

★みんなに知ってもらいたいことを書く。

★詩の意味を考える。

★いつごろ、どういった音階でできた歌か、どういったことを歌った歌か調べる。

画の紹介

○自分の名前をフルネームで丁寧に書く。

のお気に入りの歌



河内小学校

一人一曲童謡の持ち歌を披露

「リクエストを待ってます」

歌詞が書かれた色紙の前で歌声を披露する児童

「この歌を聞かせたい歌が聞かされてほしい」というと教室から児童が一人やうて来て歌ってくれる。東広島市立河内小学校（木原加代子校長）は、こんなユニークな取り組みを行っている。全児童104人が一人一曲、童謡の「持ち歌」を持っているのだ。

職員室前の廊下の壁には、童謡の歌詞が書かれた児童手作りの色紙が貼られている。同小は市の伝統文化推進指定校で、取り扱っている童謡は、生活の中から生まれ

た童謡から昔の暮らしを想像したり、字んたりしている。「夕焼けこやけ」を詠下いっばいに響かせた1年生の田村文乃さん（6）は「初めてのリクエストで歌ったら気持ちよかったです」と笑顔。同校では、童謡のほかにも放課後の集団下校前の時間を活用して、自主的に習字をする環境を整えている。

東広島・竹原地域ニユース

平成 20 年 1 月 25 日（金）プレスネットに掲載



平成 20 年 2 月 21 日（木）広島テレビ「ハ〜イ 東広島です」の取材
平成 20 年 3 月 2 日（日）7:45〜放映